

社会科・観光の授業でどんな力が身につくのか

—資源を見だし・整理する学び—

玉川大学教育学部 教授 寺本 潔

① 創造的な時間

地域や国土、外国のようすを扱う社会科にとって、観光を通した学びはその地域の特性をリスペクトする習慣を養うことにつながり、場所への愛着はもとより、地域の持続的な利用を考えようとする姿勢を育てる。新しく観光資源を見いだしたり、資源の価値を整理し、地図に示したりするなど、創造的な時間が楽しめる。筆者のふるさである熊本県を例にあげれば、^{あまくさ}天草という多島海が国立公園内にあり、風光明媚な土地柄であるにもかかわらず、今一つ観光地として発展しきれていない現状がある。島々を結ぶ五つの美しい橋に加え、何ととっても海産物は新鮮だ。さらに天草オレンジとよばれる柑橘や地鶏で有名な天草大王、色とりどりの花卉も特色ある資源である（図1参照）。

天草といえば美少年、天草四郎の物語もある。隠れキリシタンの文化（キリスト教遺産群）が、世界遺産への登録目前である。これらはいずれも土地柄と密接な関連を有しているため地図帳で位置づけられる。つまり、地図を介して観光資源の再認識がうながされるわけだ。資源を地図に表すことができれば、それらをめぐる観光ツアーの提案ができる。コース取りは創造的な学びにつながり、パンフレットやコンテンツを生かした観光まちづくりへ向けた子どもたちの参画が促進できる。まさに、地域に発し地域に根づく社会科が実現できる。

一方、来訪客を迎える観光でなく、自分自身が旅に出かける観光旅行（図上）の授業でも多くの学力が養える。観光情報の入手、旅程立案、地図や時刻表活用の技能、方言や外国語会話、旅行先の歴史や文化・習慣の理解が図上旅行を成功させる鍵となる。欧米の社会科教科書には、観光が学習内容として取り入れられている。我が国の社会科にも早期にこの種の学習を導入したい。理想的には、社会科4年の単元「私たちの〇〇県」が観光単元に組みかえられ、5年に新単元「外国への旅」が導入できればと夢見ている。



図1 地図帳における熊本県天草地方
『楽しく学ぶ小学生の地図帳』p.19～20①「九州地方」（旧p.19～20）

* 地図帳の参照ページの「旧」は、5、6年生が使用している地図帳『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』を表しています。

② 「道の駅」の教材開発

現在全国で1059か所（2015年4月15日現在）にも増加した「道の駅」（国土交通省が設置した公共施設）は、人気だ。土地の特色ある農産品や水産物を買えたり、足湯やおいしい食事を楽しめたりする。詳しい交通・観光情報が得られるだけでなく、電気自動車充電設備や防災機能も有する多機能施設である。「道の駅」自体を目的に車でやってくる来訪者も多いという。教材「道の駅」は、単元「私たちの市（町、村）」「物をつくる仕事・売る仕事」「私たちの〇〇県」「我が国の食料生産」「交通・運輸」「暮らしの向上と情報」「政治の働きと身近な公共施設の建設」などの諸単元で登場できる。もし、学校近くに「道の駅」があるならば、見学・調査させてもおもしろい。観光資源としてすぐれた地元産品について調べた内容を壁新聞にできたら、道の駅ではり出してもらえないかもしれない。学校と地域をつなぎ、発信も可能となるうまみがこの学習にはある。総合的な学習の時間と組んで、観光まちづくり学習に上げることができらるだろう。

③ ホスピタリティ（おもてなし）育成

小学生から始まるキャリア教育は、観光を題材にすればうまくいく。なぜならば、観光は来訪者（観光客）という他者の目を意識させ、ひとりよがりの見方を是正させるからだ。注目すべき動きがある。沖縄県で全4年生に配布されている観光副読本『沖縄県観光学習教材』（47ページ、カラー）は、すばらしい（図2参照）。おもな内容を列記すれば、第1章「観光」ってなんだろう？、第2章 沖縄にはたくさんの方が来る、第3章 沖縄観光



図2 沖縄県で使われている
観光副読本
『沖縄県観光学習教材』
（沖縄県・一般財団法人 沖縄観光
コンベンションビューロー）

の魅力、第4章 沖縄の観光産業と働く人たち、第5章 私たちと観光 となっている。観光がいかにも多くの産業と関係しているか、県民の一人としてホスピタリティ精神の涵養が大切かがこの副読本を通して伝わってくる。沖縄県に学び各地の県社研が主導し、現在使っている社会科副読本にもっと観光の視点を取り込めないだろうか。

④ 求められる他者のまなざし

小学生は自分の生まれ育った地域社会や県、国に対し、愛着が強いため、観光資源を学べば、容易に質の低い「まち自慢」「お国自慢」におちいりやすい。観光地の写真やみやげ物、キャラクターに強い関心を示し、一見楽しく授業に取り組むが、社会認識が浅いレベルにとどまりがちになる。こうした落とし穴を避けるうえでも、観光の授業は問題解決学習で立案したい。「どうして年間〇〇万人の観光客が自県にやってくるのか」「リピーター客は何を楽しみに再訪してくれるのか」「A県と比較して、なぜ自県は観光客が少ないのか」「交通や観光資源に問題はないか」「自分たちも地域の観光振興に何か手助けできることはないか」などといった課題を明確化しつつ授業を進めたい。持続可能な観光の担い手は次世代である子どもたちである。息の長い地方創生につなげるためにも観光人材の育成は不可欠である。



◆観光授業の玉手箱

- ① 身近な地域や自県の観光資源を地図を介して整理する学びは、社会科にぴったり。
- ② 沖縄県で開発された副読本に学び、自県の副読本に観光要素を取り入れよう。
- ③ 「お国自慢」でなく学力が身につく問題解決スタイルで観光の授業を構築しよう。